

ヘルムート・ニュートン、ヌードに託した反骨心

Photos: Hei Shui, Corcoran&Krissovs, Yusaku Kasei, Toshi Yabuyaki, Takaya Ichi

ヘルムート・ニュートンがヌードに見出した可能性はあまりにも大きい。まるで彼だけが、秘密の鍵を手に入れたかのように、その作品に宿らせる圧倒的な引力は、少しも色褪せる兆しを見せないのだ。今となっては、故人となった彼の術を解き明かすことなど不可能かもしれない。けれど、一縷の手がかりを求めて、在りし日の足跡をたどるべく、ベルリンにあるヘルムート・ニュートン財団、キュレーターを務めるマティアス・ハーダー氏を訪ねた。

「ヘルムート・ニュートンは魅力的な性格で、人を惹きつける写真家でした。普段から控えていたが、ベルリナー特有のユーモアのセンスを持ち合わせ、フランス語、英語、ドイツ語を流暢に話す、言語に長けた人物でもありました。きっと、その誠実さが多くの人を虜にしたのでしょ。写真家としては、最後まで自分のスタイルを貫き通しました。写真史において常に新しい視点を提供

し続けたといえます。そして驚くことに、80歳を過ぎても若い写真家でした。35歳の写真家と同じくらい、雑誌の仕事もコンスタントに続けていたのです。晩年こそ数は多くなかったかもしれませんが、とにかく仕事がないという状態がなかった。その時代ごとに、衝撃的な作品を発表していたのです。ツァイトガイスト(時代思潮)を賞し、独自のスタイルを確立していました」

「ニュートンの功績を振り返るとき、まずはその徹底したプロフェッショナルな姿勢について触れておかなければならないだろう。彼は、アーティストと呼ばれることを拒み、商業写真家であると公言し続けた。また、自らを、"a man of line," つまり、雇われの殺し屋」とでも称し、引き受けた仕事をひたすらまっとうしようとしたのである。

「1920年生まれのニュートンにとって、当初、写真は芸術であるという認識は馴染みのないものだったのです。そうした傾向は80年代以降に顕著なものであり、彼にとっては後のことでした。むしろニュートンは、稼ぎになる写真を撮る、ということを実践した世代的写真家です。その行為は、アートの領域ではなかったといえるでしょう。それから時を経て、80年代、90年代に移ると、彼の作品がアートと呼ばれるようになり、しかしニュートンは、自分の意思に忠実に、私は写真家だ。アーティストではない」と主張し続けたのです。とは言え、もちろん、彼の作品に対する評価はそれにとどまりません。たとえば美術史家の私にとって、彼の作品はやはりアートの概念と関連があるのですからね」

数々の力強い作品からすると意外かもしれないが、その仕事に向き合う姿勢は、決して大仰ではなかったという。生前よく口にしていた「It's a Man's World」の精神が、常に脈打っていたのだろう。

「モデルや著名人と話すときにも慎重で控えていました。撮影はいつも小さなチームで行っていました。ある決まりを作っていたのでしょ。大切にしていたのは、エロチックな親密さではなく、個人同士のコミニケーション。モデルとなる人物と繊細なやりとりを重ねていったのです。そのため、ほとんどの場合、撮影のアシスタントは1人だけでした。後に、ビッグメゾンの大きなプロジェクトの際などには、ヘアメイクなどスタッフが増えていくわけですが、それは90年代に入ってからのこと。他のカメラマンのように、膨大な照明機材を使ったり、アシスタントを5人も呼ぶようなことはありませんでした。そうしたことが、カメラの前にいるモデルとニュートンを、また違った創造性へと導いたのかもしれない。ロケーション選びについても、自分の滞在している場所から1〜2マイル以上は離れない」と、自ら語っています。訪れた土地の人にアドバイスをもつことはあったようですが、アシスタントが血眼になって撮影場所を探そうなどとはなかったと断言できます。

「筋肉質な体には、かなりこだわりがあったようです。モデルに内在するパワー



マスク、手鏡、ヒメヘンなど、同じ撮影用に用意された演出のためのプロップス



上/晩年を過ごしたモンテカルロの寓居から、仕事場を再現したという展示。下/肉感的なボディを強調するための撮影に使用された小道具



写真美術館への来客を誘うくくる、ほやかな表情のアダム・ニュートンのポート

「に惹かれていたのでしょね、作品の中で彼は、女性に、権限や、支配力を与えました。それは、ある一定の姿勢、肉体的な存在感、加えてヌードであることによって機能したので。またその役を演じるアクトモデルを見てみると、そのほとんどが靴を履いているなど、完全なヌードではない。これは彼流のユーモアですね。女性的な意識をアピールしながらも、心の中まではさらけ出さないとばかり牽制するかのよう」

「World Without Men (1984)」というタイトルの写真集も出版していますが、それは、女性が世界の主役であり、ひとりでも生きていける、男は付属品である、とでもいうような写真表現でした」

様々なヌード写真にアプローチし続けたニートンであったが、彼がヌードに著しく傾倒していく契機は思いがけないものだったことが知られている。

「ニートンは1971年に心臓発作を起こしました。その際、死の淵をさまよいつながら、白昼夢のなかで数多くの全裸の女性を見たのだそうです。そのような体験から、ファッション写真にヌードを取り入れるというアイデアが浮かんだと言います。そして70年代前半から、実際にヌードの要素を採用していく、そうしたことが可能な雑誌に発表していったのです。76年にはあの「White Woman」が刊行されました」

当時、そうした挑発的なヌード写真を発表することが容易でなかったことは想像に難くない。作家本人の意に反し、女性からの反発も少なくなかったという。

「ウーマンリブの時代ですから、当然そうでした。しかし彼は、そうした外野の声にまったく動じなかった、彼は自立

してましたし、その真意は間違ったものではなかったのです。また彼のそういう活動について、夫人であるジーン・ニートン、写真家のアリス・スプリングスが助言を与えていました。彼女自身もニートンの作品の中にヌードが登場していますし、献身的なサポーターだったのです」

そもそも、屋外でヌード撮影を敢行すること自体、当時も決してやさしいことではなかっただろう。

「危険な場面は幾度もあったと思います。すぐに撮影を止められることもあったようですね。たとえばフランスの地下鉄でのヌード撮影など、もちろん絶対に禁止されているわけですが、それでも彼は実行に移しました。裸にコートを羽織らせるなどして撮影したのです。このように、モデルに何らかの役を演じさせるアクトフオートの面白さは、余計なキヤスティングなどしないで、日常の場面に入り込んでいくことにある。それが一枚一枚の写真に反映され、ひと目で伝わるのです。あるいは、ボンテージアイテムを使った一連の作品など、誇張したアクトもかなり楽しんでやっていたようです。そうした要素を巧妙に取り入れることで、やはりツァイトガイストが語られているのです」

確かに、ニートンの残した数々の作品は、時にはタブーと背中合わせにある深淵な真実さえ探入しているようだ。

「彼はいつも境界線ギリギリのところをうまく利用しました。たとえば、雑誌にはそれぞれの可能性、限界というものがあられるわけですが、彼はそれまで限界とされていたラインを越えていったのです。かつて、アンリ・カルティエ・ブレッソンは、雑誌に載っているような写真は、1秒以上見てもらえたらいいほ

うだと言ったそうです。その意味でニートンは成功したといえるでしょうね。彼の写真は、他の写真家の作品に比べて、より長い時間をかけて見られているでしょっから」

果たして、ここに鍵があるのかもしれない。いわゆる私小説的な写真の対岸にありながら、普遍的な美を模索する姿勢が、多くの人を惹きつけてやまない写真に結実したのではないかと、親密さに甘んじることなく、時には冷徹なほど、より美しいものを探し求めようとする心が、彼を突き動かしたのではないかと。

「それは大きなテーマですね、親密さを認識しながらも、モデルとある一定の距離感を保つこと。それは、彼の写真の大きな特徴のひとつです」

それでは、ニートンの中に激しく渦巻いていたであろう、ヌード写真に対するモチベーションはどこから湧き上がっていたのか。

「それについては、お答えすることができません。残念ながら、彼の心の中、頭の中で考えていたことについては、私にはわからないのです」

ニートンが秘密裏に写真の中に残してくれたもの。その危うい輝きが失われないうちに、彼の作品はこれからも強烈な引力を放ち続けるだろう。

Helmut Newton Foundation
Museum für Fotografie

Jebensstrasse 2, 10623 Berlin, Germany
www.helmutnewton.com

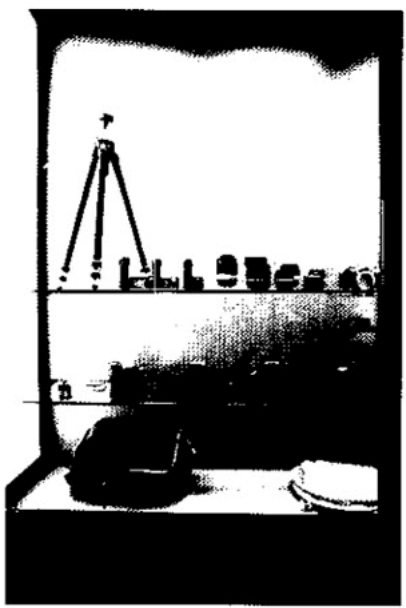
開館時間: Tuesday-Sunday 10:00-18:00
Thursday 10:00-22:00 休館日: Monday



右: 合同のインタビューに答えてくれたヘルムート・ニートン(前列右)と、クマ・マリアス・ハック氏(前列左)のSUMO: H26.7x37.4cmと手帳サイズの480ヘーンの大木フレーム



トノ様々なエキシビションのホスト。など、早急なタイムスリップ。ニートンが80歳の誕生日を記念して、デュッセルドルフ、ノーフウォー・シウンアーロに制作した自転車



キヤノン、ペンタックス、ニートンと実用のカマフラ機材が並ぶ。ニートンも喜ぶところがある